

# 「脱形式化」としての文明化過程論

## － オランダ・エリアス学派による文明化過程論の新展開 －

市井 吉興\*

本稿の目的は、エリアス社会学のアクチュアリティを、オランダ社会の社会変動を背景にしたオランダ・エリアス学派の営みを通じて考察することにある。オランダ・エリアス学派は、エリアスのオランダ招聘と平行して、スポーツ・レジャー研究を通じて新たな展開を見せたエリアス社会学の理論枠組みを用いることによって、社会変動を誘引した「脱柱状化された文化変容」を検討し、独自の研究を展開することとなった。まさに、エリアス社会学の新展開は、オランダにおいて成し遂げられたのである。なかでも、本稿は、ウォウターズ (Cas Wouters) の「脱形式化 (informalization)」概念に注目し、この概念の意義を「自己抑制」概念に対するウォウターズとエリアスとの解釈の差異からアプローチすることを試みる。この試みを通じて、ウォウターズが成し遂げた文明化過程概念の新展開は、エリアス社会学のアクチュアリティとして位置づけられると考える。

**キ - ワ - ド : エリアス, 文明化過程, 列柱状社会分割 (verzuiling), 脱柱状化 (ontzuiling), オランダ・エリアス学派, ウォウターズ, 脱形式化**

### 目次

#### はじめに

- I オランダ・エリアス学派とオランダ社会
  - II エリアス社会学再考
    - 文明化過程論と人間像の転換 -
  - III 文明化過程と脱形式化 - カス・ウォウターズによる文明化過程論の新展開 -
- おわりに

#### はじめに

1990年8月、ノルベルト・エリアス (Norbert Elias 1897-1990) は、オランダのアムステルダムにて客死した。エリアスにとって

オランダは、単に最期を迎えるための安らぎの地ではなく、それ以上に彼の社会学的営為の成熟を迎える場所であったのである。それは、1960年代末に客員教授として招聘され、オランダの社会学者たちとの出会いによって運命づけられたのである。また、同様にオランダの社会学者たちも、後に「オランダ・エリアス学派の結集」というように、エリアスによって運命づけられたのである。

社会学思想史において、エリアス社会学が注目されるようになるのは、1960年代後半からである。周知のように、この時期は、戦後の社会学理論の中心を担っていたパーソンズの構造 = 機能分析が、その出生地アメリカにおいて批判の対象となり、1968年革命によって全世界

\* 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

的に社会学の中心理論から完全な撤退を余儀なくされるという社会学理論の変動期であった。このポスト・パーソンズの座をめぐる諸社会学理論のひとつとして、エリアス社会学に対する関心が持たれ始めたのである。また、エリアスの主著『文明化の過程』が1939年の初版以来、30年後の1969年に再版されたことも、エリアス再評価の背景となっている。

それ以上に、エリアスが再評価される1960年代とは、エリアス社会学自身が大きな展開を成し遂げた時期であった。それは、エリアスが赴任していたイギリス・レスター大学において、ダニングとともに行ったスポーツ・レジャー研究とスコットソンとともに行ったレスターにおける労働者階級に関する調査研究に現れている<sup>1)</sup>。これらの研究は、エリアスの『文明化の過程』で提示された理論枠組みの応用的研究であったが、なかでも、エリアス＝ダニングは、その当時周縁的だったスポーツ・レジャー研究を、積極的に社会学の主要問題として位置づけることを試みていた。

彼らのスポーツ・レジャー研究の成功の背景として、1960年代のヨーロッパ、アメリカが戦後復興としての経済成長を成し遂げ、産業化の進展による「豊かな社会」の実現を可能なものとし、そのことから、スポーツ・レジャー研究が「余暇研究」として注目を集め始めたことにある。しかし、この余暇研究は「労働時間」対「余暇時間(自由時間)」という「時間区分」の二元論を前提としており、そこには、産業化の進展と労働形態の変化のなかで余暇活動が充実していくという近未来的な志向性を反映した余暇論(例えば、デュマズディエによる代表されるような研究)が試みられていたのである。しかも、このような余暇論のパーспек

ティヴは、産業社会論と関連する経済学、経営学といった他の社会科学においても共有されることとなった<sup>2)</sup>。

エリアス＝ダニングが試みたスポーツ・レジャー研究は、エリアスの主著『文明化の過程』において提起された「文明化過程」概念の応用的研究と言えるが、「スポーツ・レジャー研究を通じて、従来考えられていた個人と社会の関係を問い直す」とエリアスが述べるとき、彼の意図はスポーツ・レジャー研究を超えたところに存在していた<sup>3)</sup>。確かに、現代社会におけるスポーツ・レジャー状況は、個人と社会との関係の変容を示すには十分であった。そこで、エリアスは、スポーツ・レジャーの社会的機能を「興奮の探求(quest for excitement)」と位置づけたが、同時に「感情を抑制しつつ解放する(controlled decontrolling of emotion)」というテーゼを用いて、個人と社会との関係を単なる「過剰体験」によって説明することを避けている。この点に、エリアスが文明化過程論を構想する際に依拠したフロイトの精神分析論を特徴づける「超自我(super ego)」論を克服し、歴史のなかでの変動的な人間本質を理解するための「新たな文明化過程論」への転換を見出すことになる。オランダ招聘の際、エリアスは、この「新たな文明化過程論」を持ち込むこととなったが、奇しくも、これは「列柱状社会分割」と「多極依存型デモクラシー」というこれまでの社会安定化機能の崩壊に直面し、新たな社会秩序形成を模索していたオランダ社会において、独自の展開を示すこととなったのである。

さて、本稿の目的は、エリアス社会学のアクチュアリティを、オランダ社会の社会変動を背景にしたオランダ・エリアス学派の営みを通じ

て考察することにある。オランダ・エリアス学派は、スポーツ・レジャー研究を通じて新たな展開を見せたエリアス社会学の理論枠組みを用いることによって、社会変動を誘引した「脱柱状化された文化変容」を検討し、独自の研究を展開することとなった。まさに、エリアス社会学は、オランダにおいて新たな展開を成し遂げることとなったのである。なかでも、本稿は、ウォウターズ(Cas Wouters)の「脱形式化(informalization)」概念に注目し、この概念の意義を「自己抑制」概念に対するウォウターズとエリアスとの解釈の差異からアプローチすることを試みる。この試みを通じて、ウォウターズが成し遂げた文明化過程概念の新展開は、エリアス社会学のアクチュアリティとして位置づけられると考える。そのためにも、本稿は、まずオランダにおけるエリアス社会学の受容を、歴史的に追構成することから始めていくこととする。

## I オランダ・エリアス学派とオランダ社会

1977年、エリアスの生誕80周年記念論集として*Human Figuration*が、エリアスと関連があるイギリス、ドイツ、オランダの社会学者たちによって上梓された<sup>4)</sup>。この論集の特徴は、エリアスの功績を賞賛することにとどまらず、エリアスの影響を受けた彼の弟子たちの研究成果が網羅されていることにある。つまり、エリアス社会学に対する個人的な取り組みは、これ以前にも多数存在していたが、この論集は、国境を越え、集团的にエリアス社会学が検討された初めての取り組みとして記されるのと同時に、ここで提出された諸論考は、現在においてもエリアス研究の金字塔として位置づけられる

のである。

この論集で異彩を放っているのが、ハウツプロム(Johan Goudsblom)、ファン・ベンテーム・ファン・デン・ベルヘ(G.van Benthem van den Bergh)、ブロック(Anton Blok)、スワーン(Abram de Swaan)、ヴィルターディンク(Nico Wilterdink)、ウォウターズ(Cas Wouters)らによって構成されているオランダ・エリアス学派による諸研究である<sup>5)</sup>。なかでも、ハウツプロムは、*Balans van de sociologie* (1974)において、その当時の理論社会学の中核をなしていた「構造=機能主義」、「現象学的社会学」との比較を通じて、エリアス社会学の独自性を描き出し、オランダ社会学界においてエリアス研究を推進させた第一人者である<sup>6)</sup>。また、スワーン、ヴィルターディンク、ウォウターズらは、ハウツプロムの影響、指導を受け、注目を集め始めた社会学者たちであった。

本節では、エリアス社会学とオランダ・エリアス学派との関連を検討していくことになるが、その際、エリアス受容の歴史的経過を*Human Figuration*に収められたハウツプロムの*Responses to Norbert Elias's work in England, Germany, the Netherland and France*、ならびにクラネンドク(Willem H. Kranendonk)によって編纂された*Society as Process - A Bibliography of Figurational Sociology in the Netherlands (up to 1989)*の「序文」として書かれたハウツプロムの*Twenty Years of Figurational Sociology in the Netherlands*を参照に、整理することを試みる。

さて、オランダにおけるエリアス受容の歴史的経過の整理であるが、この課題は、エリアス

の主著である『文明化の過程』が出版された1930年代という時代と大きく関係がある。特に、オランダの知識人たちは、ナチス・ドイツの迫害から逃れてきたドイツの亡命知識人たちの逃亡支援、ないしは研究支援を熱心に行っていた。例えば、エリアスが社会学者としてのキャリアを出発させたハイデルベルク時代に助手として仕えたマンハイム(Karl Mannheim)の『変革期における人間と社会』の初版本は、1935年にライデンで出版されている。また、同年にエリアス自身もドイツからの亡命者によってアムステルダムで発行されていた雑誌*Die Sammlung*に*Kitschstil und Kitschzeitalter*を掲載したこともあり、マンハイムほどの有名人ではなかったにしろ、エリアスに対するオランダの知識人たちの注目も例外ではなかったといえよう<sup>7)</sup>。しかし、1939年にスイスで出版された『文明化の過程』は、6本の書評が著されただけで、ほとんど注目を集めなかった。とはいえ、これらの書評には、すでに後年、特に1960年代後半から始まるエリアス再評価の際に見られた「論点」ないし「誤解」が指摘されていた<sup>8)</sup>。

『文明化の過程』は、第一巻「ヨーロッパ上流階層の風俗の変遷」と第二巻「社会の変遷/文明化の理論のための見取り図」から構成されているが、ほとんどの書評が、第一巻に対する積極的な評価に終始していた。例えば、フォルケスは『文明化の過程』の書評を二回(1939年と1941年)行っているが、その二回とも第一巻を中心に行われており、精神分析理論の立場からこれを高く評価した<sup>9)</sup>。テル・ブラークは、オランダがナチス・ドイツの侵攻による戦禍に巻き込まれたこともあり、第一巻に対する言及しか出来なかったが、なかでも、彼は、

フォルクスが言及することのなかった「文化(culture)と文明化(civilisation)」との比較に注目し、エリアスを「ホイジンハに比類する文化史家」と評した<sup>10)</sup>。ポウマンは、エリアスの試みを歴史心理学と文化の歴史社会学と位置づけ、結果的にはフォルクスとテル・ブラークの評価を折衷した書評を著したのである<sup>11)</sup>。

このように、第一巻を中心にした分析によってエリアスを文化史家、社会心理学者とみなす評価を与えた書評に対して、社会学者であったボンハーは、先の彼らとは対照的に、第二巻に注目し、これを社会的に重要な位置を持つものと指摘した。なかでも、ボンハーは、国家形成過程が諸個人の精神構造にいかなる影響を与えるかというエリアスの論点を高く評価し、この論点を心理学者だけでなく、社会学者や歴史学者も真摯に取り組むことを要請したのである<sup>12)</sup>。このような指摘は、『文明化の過程』を構成する第一巻と第二巻には連続性はなく、むしろ第二巻において試みられた国家形成過程の分析は、第一巻において取り組まれた文化史的・精神分析的成果を蔑ろにしてしまうというポウマンの評価とは対照的であり、また、後年のエリアス評価における重要な論点を先取している。

エリアスが『文明化の過程』において構想したことは、「文明化過程」概念を用いて、中世から開始されるヨーロッパ社会の編成秩序の変化を個人の文明化過程(外的抑圧から自己抑制へ移行)と社会の文明化過程(国家形成過程)とが重層的な編み合わせ(フィギュレーション)を構成していく過程を明らかにすることであった。しかし、個人の文明化過程と社会の文明化過程との関係が十分に理解されないということは、『文明化の過程』という著作の不完全性にあ

るとみなすことも出来る。例えば、この点は、バウムガルト(Ralf Baumgart)とアイヒェナー(Volker Eichener)が指摘するように、『文明化の過程』第三巻として構想されていた「諸個人の社会(Die Gesellschaft der Individuen)」が、1939年に『哲学と特殊研究のためのスウェーデン学会年鑑』に発表されたものの、それが『文明化の過程』との連続性を持ったテキストとして明確に位置づけられなかったことにある<sup>13)</sup>。確かに、これらの書評は、『文明化の過程』の全体像を把握し、さらにエリアス社会学の方向性 - エリアスを「社会学者」と評したのは、ボンハーとボウマンの二人のみであったが - を示すことは出来なかった。さらには、悪化する時局とともに、これらに続くエリアス研究は途絶えてしまい、新たな研究の登場は、第二次世界大戦後まで待たれることとなった。しかし、オランダにおいては、エリアスに対する関心は継続していたのである<sup>14)</sup>。

戦後、オランダ社会学は復興期を迎えるが、ボンハーの影響を受けた戦後オランダ社会学の第一世代たちは、「社会記述学(sociography)」<sup>15)</sup>と称される調査研究を主体としたこれまでのオランダ社会学を刷新するために、積極的に欧米系の社会学を摂取していくこととなり、同時に、エリアスに対する関心も復活することになった。つまり、エリアス研究は、オランダ社会学復興期における新たな理論構築という課題として位置づけられ、その試みの過程において、『文明化の過程』というテキストは、従来型のオランダ社会学と現代社会学理論とを架橋するものとして注目されたのである。

一般に、エリアスがオランダ社会学のなかで注目を集め始めるのは、エリアスが客員教授と

して招聘された1960年代後半からである。このエリアスのオランダ招聘は、ハウツプロムを中心にして計画されたのであるが、エリアスは1969年にアムステルダム大学歴史学部、1970年に同大学の社会学部、1971年にハーグの社会研究所に招聘されることとなった<sup>16)</sup>。このことにより、オランダの社会学者たち - 特に若手・中堅を中心に - は、エリアスに対する関心を高め、これ以降、エリアス研究は加速することとなる。特に、この時期は1968年革命の余波のなかにあり、オランダも他国にも劣らぬ大きな社会変動を経験し、その社会変動を分析する新しい理論枠組みを社会学者たちは求めていたのである。

周知のように、戦後の社会学理論の中心を占めていたパーソンズの構造=機能主義は、その出生地アメリカにおいて1960年代から批判の対象となり、さらには、1968年革命によって全世界的に社会学の中心理論から完全な撤退を余儀なくされた。先にも述べたように、オランダ社会学は、伝統的に経験・実証を重視する調査研究(社会記述学)を主体としていたため、戦後の社会学復興期にアメリカ社会学的な調査研究は、必然的に受容の対象となっていた。それゆえに、構造=機能主義の衰退は、オランダ社会学に多大な影響を及ぼすこととなった<sup>17)</sup>。これまで社会学理論に対する関心が薄かったオランダ社会学であったが、先の1968年革命で批判的な立場を取った学生・院生たちは、法兰克福学派、ネオ・マルクス主義といった批判理論、他の若手研究者たちはシンボリック・インタラクシオン、エスノメソドロジーといったポスト・パーソンズ社会理論に対する関心を高めていった<sup>18)</sup>。このような社会学の理論状況のなかでエリアスも1968年革命以降の重

要な理論的地位を獲得することになったのである。

さて、エリアスが客員教授として招聘され、そこで何を主題としたのであろうか。先にも述べたが、この問題は、1968年革命によって生み出された劇的な社会変化を如何に把握し、分析するのかということになる。そこで、エリアスは「行動(風俗)や道徳(モラルティ)のコードの変化とそれらの変化がどのような権力関係のもとで生じたのか」という論点を立て、1960年代の社会変動を誘引した「文化変容」の分析を試みたのである<sup>19)</sup>。周知のように、ヨーロッパ諸国は、第二次世界大戦後の戦後復興、経済成長のもとで生じた経済・社会変動によって市民の社会・生活意識、行動様式にも文化変容と呼ぶに値する大きな変化が生じた。なかでも、オランダは、1968年革命へと収斂していく文化変容を1960年代から経験していたが、この文化変容は、オランダ社会の安定化機能とみなされていた「列柱状社会分割(verzuildheid)」と「多極共存型デモクラシー(consociational democracy)」に対する動揺を与えるに至ったのである。

この多極共存型デモクラシーは、オランダ出身の政治学者レイプハルトの研究によって政治学を中心に紹介され、一時期日本においても注目を集めたものである<sup>20)</sup>。この概念は、現代民主主義の理論と体制は、アングロ・アメリカ的な「多元主義」に尽きるものではないという批判に起点を持つ。特に、1960年代以降、アメリカのデモクラシー自体の安定性が問われ、また、アングロ・アメリカ型のモデルが、まったく異なった条件下にある国々において適応することが困難になったのである。そこで、レイプハルトは、中欧型デモクラシー、なかでも「宗

教」と「階級」を基礎にした「サブ・カルチャー」の分裂を前提にしたオランダ政治の安定モデルに注目するのである。なお、この安定モデルは、単に複数のサブ・カルチャーが存在しているだけでなく、政治社会がサブ・カルチャーによって分割されており、しかもそれぞれのサブ・カルチャーが拮抗して、いずれか一つが支配的になることがないという特徴を持っている。

さらに、この多極共存型デモクラシーは、各政党がその下に、それぞれの系列化された機能的社会組織を持つことを特徴としているが、これをオランダでは「柱(zuil)」と呼んでいる。また、諸組織の系列化の歴史的進展は「柱状化(verzuiling)」と名づけられており、オランダ社会は、4つの柱によって分割されていた<sup>21)</sup>。この柱の特徴であるが、そこには教会、学校、労働組合、農業労働者団体、経営者団体、ラジオ・テレビ等の各種メディア、様々な社会福祉事業、スポーツや趣味のクラブといった、ほとんどの日常生活に関わる社会的機能集団がそれぞれの政党のもとで組織され、各個人はいずれかの柱のなかで十分な生活を送ることが可能になっているのである<sup>22)</sup>。このように、社会が4つの柱によって分割されていたオランダ社会の状態は「列柱状社会分割(verzuildheid)」と呼ばれていたのである。

しかし、1960年代後半から「列柱状社会分割」と「多極共存型デモクラシー」との関係に動揺が現れる。しかも、この動揺は、特にオランダ社会を特徴づけていた「列柱状社会分割」の根本である「柱」の存在意義に対するアンチテーゼとしての「文化変容」によってもたらされたのである。例えば、この文化変容は「プロヴォ(Provo)」と呼ばれる若者グループ、学生

運動、徴兵制によって募集された一般軍人による兵士労働組合「ドレ・ミーナ(Dolle Mina)」に代表される女性解放運動といった「反権威主義運動」に代表された<sup>23)</sup>。一般に、反権威主義運動は、1960年代を象徴する時代精神として全世界的な傾向であったが、オランダのそれは、先に述べた「柱」を横断した運動を組織したことに特徴を持っている。このような文化変容の過程は、オランダでは「脱柱状化(ontzuiling)」と呼ばれており、この脱柱状化によって列柱状社会分割は解体し、多極共存型デモクラシーは変更を余儀なくされる<sup>24)</sup>。田口は、この脱柱状化を集団＝組織形態の変化という観点から次の三点に特徴づけているが、彼の指摘は、オランダ・エリアス学派が試みたオランダ社会分析を理解するうえで重要な論点をまとめている<sup>25)</sup>。

まず、第一に、従来の4つのサブ・カルチャーの外に、伝統的な宗派对立やイデオロギーと無関係な、様々な運動集団が発生し、彼らが異なった社会領域で異なる目的を目指しつつ、柱を外から蚕食していった。第二に、これと呼応するように、各柱内部で、諸々の社会集団間の連帯が緩み、かつ上からの指導や統制が脆弱化し、それぞれの集団は、他の柱内の同種集団との連帯を模索するようになり、伝統的な列柱状社会分割は、外と内の両方から崩壊していくのである。さらに、第三に、ここで指摘した伝統的な列柱状社会分割の崩壊は、これまでの集団＝組織が完全に消滅し、「大衆社会状況」のような、諸個人が分断された社会状況が生まれたことを意味するのではない。むしろ、規模の縮小はあったにせよ、依然として様々な社会集団は存在し、しかもそれらが「自発的結社」として活発に活動を展開する社会が登場したの

である。

当然のことながら、このようなオランダ社会の変動は、多くの社会学者の関心を引き起こすこととなった。特に、オランダ・エリアス学派は、脱柱状化という現象を、単に政治経済的な枠組みの変容であると位置づけるのではなく、同時に、諸個人のパーソナリティー・ストラクチャーの変容と位置づけることとなった。つまり、彼らは、社会変動の契機となった脱柱状化された文化変容とパーソナリティー・ストラクチャーの変容との関係に注目したのである。彼らの問題意識を考察する際、このパーソナリティー・ストラクチャーの問題は、パーソナルの構造＝機能主義においても重要視された研究ではあるが、オランダ・エリアス学派が構想する研究は、パーソナルのように「規範(norm)」と「社会化(socialization)」との関係を主要な問題としたのではなく、むしろ、脱柱状化社会の出現によって従来の社会規範が崩壊した無規律社会、すなわち「寛容社会(permissive society)」の社会発生と社会秩序との関係を考察することにあつたのである。

上述したように、脱柱状化現象は、大衆社会状況の移行でもなければ、平準化された脱イデオロギー社会の到来でもない。むしろ、脱柱状化現象は、社会的不安定状態が生じるという危険性を孕んでいるのであり、これまでのオランダ社会であれば、「多極共存型デモクラシー」によってその危険性は回避されていたのではある。しかし、諸個人が分断された大衆社会状況への単純な移行ではないにしろ、オランダ社会にも「個人化(individualization)」現象が生じており、そこには個人と社会との新たな関係が模索されており、これに対する対応は、オランダ・エリアス学派の方向性を左右するものと

なったのである。オランダ・エリアス学派において、このような課題を中心的に研究している社会学者としてウォウターズとスワーンが存在する。ウォウターズは文明化過程における情動抑制の脱形式化を主題とし、スワーンはエリアスの国家形成過程の枠組みを19世紀、20世紀における現代福祉国家形成の分析に応用し、この福祉国家形成過程と平行したパーソナリティー・ストラクチャーの変容を主題としている<sup>26)</sup>。本稿では、主にウォウターズの脱形式化概念を参照することによって、彼が試みたエリアス社会学の新展開を考察していくことになるが、このエリアス解釈の新展開の意義を明らかにしていくためにも、次章において、エリアスの文明化過程論の位置を確認しておきたい。

## Ⅱ エリアス社会学再考 - 文明化過程論と人間像の転換 -

エリアス社会学は、パーソンズを中心とした構造 = 機能主義に対する批判的モデルとして注目され、また、エリアス社会学者たちも彼らの独自性を強調するうえでも、構造 = 機能主義批判を意識的に追求したのである。この点は、先章で考察したオランダ・エリアス学派も同様であり、彼らは、脱柱状化社会の出現によって従来の社会規範が崩壊した無規律社会、すなわち寛容社会の社会発生と社会秩序との関係を考察する際に、パーソンズの社会システム論に対する批判を試みたのである<sup>27)</sup>。

しかしながら、エリアスの『社会学とは何か』(1970)に対する書評においてウォーラスが「エリアスは承認されることのない歪曲された構造 = 機能主義へと向かっている」と述べたように、エリアス、そして彼の弟子たちが試み

た「構造 = 機能主義の超克」という彼らの理論的立場はなかなか周囲の理解を得ることが出来なかった<sup>28)</sup>。また、フェザーストーンは、エリアス社会学に対して批判的な論者に共通する観点を「エリアスが選択して議論を闘わせた現代社会学理論や諸学派をエリアスは誤解し、また不正確に論じた」と概括した<sup>29)</sup>。

とはいえ、構造 = 機能主義批判を通じて、エリアス自身が自己の理論を再構成し、また同時に彼の弟子たちがエリアス社会学を再構成していくという試みは、『文明化の過程』第二版(1969)が出版された1960年代後半から本格的な営みとなり、1980年代初頭までに一定の到達点を築きあげることとなったのである。その際、彼らの理論的成果は、以前拙稿で述べたように、パーソンズが終生探求し続けた「秩序問題」に対する批判として収斂された。再度、彼らの批判を要約するならば、「エリアス社会学は秩序問題に関して静態的な構造 = 機能主義を超えるダイナミクスを有し、このダイナミクスのなかに単純な進化主義や社会統制的機能命題を越えた動態的な秩序形成過程を提起している」ということになる<sup>30)</sup>。なお、先章で取り上げた『文明化の過程』初版本に向けられた書評、さらに、後のエリアス再評価の際の論点ないしは誤解に共通する問題として、『文明化の過程』第一巻と第二巻との連続性が把握されていないことを示したが、『文明化の過程』におけるエリアスの社会的な主題は「秩序問題」であり、その考察のプロセスは「ミクロ = マクロ・リンク」として構想されていたことを指摘しておきたい<sup>31)</sup>。つまり、エリアスは、『文明化の過程』第一巻において「ミクロ」的な観点として「個人の文明化過程」を論じ、第二巻において「マクロ」的な観点から「社会の文明化過程」

を考察することとなったのである。

エリアスは西欧社会の特殊な編成秩序の動態的な変遷過程を「文明化過程」と位置づけ、社会秩序を「個人の文明化過程(情動抑制の変遷過程)」と「社会の文明化過程(国家形成過程)」とが編み合わさるところに生じる「社会的圧力(gesellschaftliche Zwang)」に見ることになる。この社会的圧力は「騎士封建社会」、「宮廷社会」そして「市民社会」といった歴史的類型として示される「フィギュレーション(Figuration)」における「相互依存(Interdependenz)」関係を規定することになる。その際、この相互依存関係の進展について、エリアスの文明化過程の中枢を成しているのが、情動抑制の変遷過程である。つまり、社会的圧力は「他者による強制(Fremdzwang)」から「自己抑制(Selbstzwang)」へという「情動抑制の転換」をもたらすのである。さらに、エリアスはこの「情動抑制の転換」、すなわち「自己抑制」の獲得が、「閉じた人(homo clausus)」から「開いた人々(homines aperti)」へという従来の社会学、哲学において想定されていた人間像の転換というプログラムを内包させていることを主張するのである。まさに、この人間像の転換を論じる鍵概念が「自己抑制」概念であり、それはエリアスが構想する独自の文明化過程論から導かれるのである。それでは、文明化過程論と人間像の転換との連関を主に『文明化の過程』に焦点を絞って、考察していきたい。

まず、エリアスの文明化過程を理解する際、エリアスがエラスムスの小書『少年礼儀作法』におけるヨーロッパの自己意識としての「文明化」をその語源となっている「礼儀(Civilité)」にその手がかりを求めたことに注

目する必要がある。歴史的に見ると、礼儀は、カトリック教会の統一と騎士社会とが崩壊した時期のヨーロッパ社会の編成秩序の具体化を体现したものであり、エリアスはエラスムスの小書の表題にある「礼儀」という言葉を「社会変動と社会過程への指摘を含んでいる特別な『流行語』」として注目している<sup>32)</sup>。そこで、エリアスは、この問題を「国家形成過程とそれに平行した人間の情動抑制の変遷」という観点からアプローチし、宮廷社会での礼儀、食事におけるマナーの変遷などを社会学的、歴史的な分析を試み、その際、フロイトの精神分析論を援用し、情動抑制の変遷過程を把握することとなったのである。

エリアスは、フロイトが『文化の不満』(1931)において、現代社会を快感原則から現実原則への転換と捉え、そこにおいて人間は、自身の根源的な苦痛、すなわち自己の内的欲動にどのように対処すればよいのかという葛藤状況に投げ込まれたという問題提起を引き継いでいる。なかでも、エリアスは、この葛藤状況の処理として、フロイトが指摘した内部審級としての「超自我(super ego)」の形成に注目し、これを彼自身の文明化論に応用することを試みるのである。その際、エリアスは、フロイトが指摘した「原始的欲求(Es)」、「無意識なるもの」が、心理分析的研究においてひとり歩きする、すなわち、これらの概念が社会・歴史的な連関を無視して利用されることに対する危機感を持っていた。つまり、エリアスは「原始的欲求」、「自我」、「超自我」といった概念が、それぞれ独立して人間の状態を把握するのではなく、これらの概念は、人間と人間の間関係、すなわち、社会的関係の特殊な変容にしたがって変化していくことを強調したのである<sup>33)</sup>。このよ

うに、エリ阿斯が文明化過程として描き出したものは、情動抑制の変容過程であり、なかでも「自己抑制 (Selbstzwang)」の形成過程であった。

エリ阿斯は、文明化過程における自己抑制の進展、すなわちフロイトが指摘した「超自我」という内部審級の成立は、社会全体にわたって暴力が独占されるという社会編成秩序の変化によってもたらされると指摘する<sup>34)</sup>。このことは、エリ阿斯によれば、社会的分業、権力闘争、市場によって引き起こされた社会的機能の分化であり、さらに社会的機能分化の進展に平行して、人間どうしが次第に緊密な相互依存関係に巻き込まれることを背景としている<sup>35)</sup>。このような社会の編成秩序の変遷のなかで、人々は自然発生的な衝動や情熱に身をゆだねないように、情動を抑え、自分の行動の影響や他者の行動を予見し、考慮するような圧力をかけるようになる。この圧力の社会的発生を、エリ阿斯は、中世後期から近代に至るまでの日常的な人間関係の変容のなかに見出そうと試みたのである。

さらに、エリ阿斯は自己抑制のモデル化を試みることになるが、これは自己抑制を迫る社会的圧力とそれを内面化しようとする自己自身による抑制が拮抗する舞台が「人間そのもの」へと移されることを意味することとなる。例えば、このことは「戦場は人間の心のなかへ移される。以前、人間対人間の戦いのなかで直接解消されていた緊張状態や激情のある部分は、今では人間が自分自身の心のなかで押し殺さなければならないものになる」というエリアスの指摘に端的に表れている<sup>36)</sup>。その際、この舞台となる「人間」の「基本構造」が問題になるが、エリ阿斯はこれを「第二の本性 (second

nature)」と述べることになる<sup>37)</sup>。

エリ阿斯は「第二の本性」を情動抑制が自然化された状態、すなわち多かれ少なかれ自己監視を自動化し、短期的な興奮を習慣化された長期的視野の掟に隷属させ、より細分化の進んだ、より強固な「超自我」装置を作ることと位置づけた<sup>38)</sup>。つまり、かつては他者への一般的な配慮を心に留めるように要求されていたことが「自分自身のために」なされるべきものとされ、社会的な圧力が自己抑制へと進展し、情動抑制の審級が、ますます強く人間自身の内部へとその場所を移していくことである。このことは『文明化の過程』『宮廷社会』において「宮廷」という権力中枢に対応して拡大した相互依存関係が、そこに集う人々に対し振る舞いの規制を強いるエピソードに十分に描き出されている。

エリ阿斯が指摘するように、自己抑制の獲得は、文明化過程の重要なメルクマールである。しかし、エリ阿斯は自己抑制という概念に、単に「自己統制」や「自己規律」といった意味合いを求めているのではなく、むしろ、それを社会的圧力に対する「抵抗」ないし「解放」として描き出すことに関心を抱いていたと解釈することが出来る。特に、この点は、エリアスのスポーツ・レジャー研究における重要な論点となっており、さらには、哲学史や精神史において自己意識や理性的な思惟 - 近年では、この問題を社会学は「再帰性 (reflexivity)」として議論しているが - を中心軸にして構想された人間像を変更していく試みへの重要な起点となる。そこで、エリ阿斯はこのような相互依存関係の社会発生の上に社会学、哲学において想定されていた人間像を転換させる試みを導くこととなる。これが「閉じた人 (homo

clausus)」から「開いた人々(homines aperti)」への転換として示されるのである。エリアスは、これを『文明化の過程・第二版』出版に際して新たに書かれた「序論」において詳細な展開を行っている<sup>39)</sup>。

『文明化の過程』において、エリアスは、「内面化」や「内化」などの概念で指摘されている個人による「自己抑制」、とりわけ自律的自動装置として設置され、他者による制御から完全に独立している「自己抑制」のひととき強力な推進を、中世後期・初期ルネッサン以降に生じた様々な出来事から導き出した。そこでは、文明化過程は人間の自己との新しい関係の発展、新しい個人構造の発展、とりわけ「情動抑制と自己客観化の強化の発展」として描かれることになった<sup>40)</sup>。しかし、この概念構成は、「文明化過程を理解するためには、近代の人間像の批判が必要である。なぜなら、この過程の進行につれて、個々の人間の構造は変化する」というエリアスの指摘を無視して考えることは出来ない<sup>41)</sup>。つまり、エリアスは、先に述べた情動抑制と自己客観化の強化が「人間の内面」という表現に表象されるように、自己抑制が「我」を「他者」から、「個人」を「社会」から隔てられたものとして「自然化」される、また、これを比喩的述べれば我と他者、個人と社会を隔てる「壁」を構成することとして理解されることに危機感を抱いていた<sup>42)</sup>。

この「壁」という比喩によって、エリアスは人間が自律した個人像として把握され、人間の本性(nature)が固定化されてしまうことに危惧を抱く。上述したように、エリアスは、人間の本性を常に変化を被るものと見なすわけであるから、まさに「壁」という比喩は、エリアスにとっては公的なものと私的なものが「せめ

ぎあう場」を意味するのである。それゆえに、エリアスは、「完全に独立した存在として、すなわち内面的に完全に自立し、一切の他人から隔絶した存在としてヨーロッパ社会の発展のなかで形成されてきた人間像」を「閉じた人」と定義することによって、伝統的な西洋哲学の「主体(Subject)」概念に対する批判を行うことになったのである<sup>43)</sup>。

そこで、エリアスは新たに「開かれた人々」という人間像を提起する。エリアスは、人間を「他人との関係において相対的自律性を多少持つてはいるが、決して絶対的、完全な自律性を持つことなく、事実上は一生涯にわたって終始他人に調子を合わせ、他人に頼り切り、他人に依存している存在」と定義するのである<sup>44)</sup>。すなわち、エリアスは人間像を完全に独立した個人像と捉えるのではなく、相互の行為のなかでフィギュレーションを形成する、つまり、諸々の集団ないし社会を形成し合う多数の相互依存的な人間像へとイメージを転換させるのである。エリアスは、このことを次のように述べる。

人間はまず生まれながらにして、続いて社会的訓練、教育、社会化、社会的に覚醒された欲求を通じて、多かれ少なかれ相互に依存しているので、もしこう表現してよければ、人間は多元性としてしか、フィギュレーションとしてしか存在しえないのである<sup>45)</sup>。

エリアスは「フィギュレーション(Figuration)」を「人間が相互に織りなす編み物」と捉え、それを構成する諸相互依存関係に現象する「権力関係(power relation)」を分析することによって、従来の社会学に見られた「個人と社会」という二元論の超克を試みるの

である。この試みは、「地位 = 役割関係」を基盤とした「制度化された個人主義」や、そこに見られる「個人と社会の相互浸透」を論じることで「個人と社会」の二元論を克服しようとするパーソンズ的解決に対する批判となっている。なかでも、エリアスの批判は、「個人と社会」という二元論を克服する試みに際して、人間を「ブラック・ボックス」と称し、人間の内面に生じる変化を考察の対象から排除し、ある特定のタイプの間像、すなわち「制度化された個人」を構想するパーソンズの試みに対する批判である。

エリアスが文明化過程概念を用いて描き出したことは、人間とは常に変化するもの、すなわち、ひとつの完全に自律した個人像ではない「開かれた人々」ということである。エリアスは、社会的分化を心理的でありかつ社会的である「文明化過程」として描き出すことによって、人間どうしが次第に緊密な相互依存関係に巻き込まれるなかで変容するパーソナリティー・ストラクチャーに関心を持っていたのである。その変容の鍵を握るのが、「自己抑制」概念であるが、この概念の理解をめぐるエリアスと彼の弟子であるウォウタースとの間でニュアンスの違いが見られる。この違いが、オランダ・エリアス学派が展開した文明化過程概念の新展開の特徴となる。それでは、次章においてエリアス文明化過程論の新展開を考察していく。

### Ⅲ 「脱形式化」としての文明化過程論 - ウォウタースによる文明化過程論の新展開 -

1976年、ハウツプロム、ブロックらの呼びかけにより、オランダの社会学者、人類学者が

結集してアムステルダム大学において*The Figurational Sociology Research Group*が結成された。この研究組織は、エリアスのフィギュレーション社会学を基調とした社会学における理論研究と調査研究との総合を集团的に目指すものであった<sup>46)</sup>。また、そこでは、オランダ・エリアス学派のみならず、イギリス、ドイツのエリアス研究者を招いた共同の研究会も行われ、先に紹介した*Human Figuration*は、この研究組織で行われた集団研究の成果が、集約されたものである。

この*Human Figuration*の出版によって、エリアス研究は、ヨーロッパを中心に拡大していくことになるが、エリアス研究のイニシアティブを握っていたのは、オランダ・エリアス学派であった。しかし、このイニシアティブというのは、エリアス学派の「正統派」を意味するものではない。むしろ、オランダ・エリアス学派の特徴は、『文明化の過程』に始まるエリアスの社会学的営為を、1960年代におけるイギリス・エリアス学派によって試みられたスポーツ・レジャー研究で提示された文明化過程概念の応用研究を継承し、それを脱柱状化するオランダ社会の分析を通じて、エリアス社会学の新展開を図ったことにある。その際、オランダ・エリアス学派、なかでも、ウォウタース、スワーンは、エリアスの文明化過程論が提示する近代的自我の批判に注目し、それを脱柱状化現象に現れる個人と社会の関係性の変容に対する分析枠組みへと再構成したのである。

先にも述べたが、エリアスは、文明化過程概念を構想する際、近代において構成された人間像を批判し、近代的主体に想定される理性的な思惟のもとでの絶対的な自律性という「神話」を暴露することを試みた。エリアスが文明化過

程概念を人間像の転換として構想する背景には、『文明化の過程』が上梓された1930年代ヨーロッパ思想を席卷していた哲学的人間学や現象学が、従来の哲学に対する異議申し立てとして試みた「人間学的転換」の影響を指摘することが出来る。しかし、エリアスが「社会学」としてこの問題に積極的に取り組むようになったのは、むしろ第二次世界大戦以降であり、なかでもパーソンズを中心とした構造=機能主義が社会学理論のなかで影響力を持ち始める1940年代から1950年代にかけてである。

周知のように、この時期は、パーソンズ社会学が主意主義的行為理論から構造=機能分析へという理論的転換を成し遂げた時期であったが、エリアスがパーソンズに対する批判的態度を示すのは、社会成員の自律性を当然のものとして想定された秩序問題にあった。つまり、この点は、パーソンズが「価値としての個人主義」の立場から「動機づけの制度的統合」と「制度化された個人主義」という秩序問題に関する基本的枠組みを構想したことに端的に現れている。しかし、このようなパーソンズの理論枠組みに対して、オニール(John O'Neil)や佐藤勉が批判するように、行為者の自律性の社会的基盤をたずね、かかる社会的基礎としての機能分化をとげた社会秩序を考えるだけでなく、むしろ行為者の自律性や自由を抑圧するメカニズムを検討する必要がある<sup>47)</sup>。つまり、彼らの批判に共通するものは、内田隆三が指摘するように「変動のさなかにおける人間性あるいは行動の主体そのものについては、変動に対してニュートラルな、奇妙な抽象的同一性が前提とされていた」という問題である<sup>48)</sup>。

特に、エリアスは、情動抑制と自己客観化の強化が「人間の内面」という表現に表象される

ように、自己抑制が「我」を「他者」から「個人」を「社会」から隔てられたものとして「自然化」される、また、これを比喩的に述べれば我と他者、個人と社会を隔てる「壁」を構成することとして理解されることに危機感を抱いていた。つまり、このような自然化こそは、抽象的な個人像、すなわち「閉じた人(homo clausus)」の定立になるのである。また、このような人間像は社会的圧力に規定されるのであり、それゆえに、エリアスは彼が構想する社会学を「人々を束縛する拘束のメカニズム」の解明と位置づけ、この拘束のメカニズムの変容を文明化過程とし、その分析の対象である「行動様式」に現象する様々な形式や規範を意識的であれ無意識的であれ、なくそうとする動きに注目したのである。

この観点を継承することになるのが、オランダ社会の安定化を担っていた列柱状社会分割と多極依存型デモクラシーの崩壊の引き金となった「脱柱状化された文化変容」を分析するオランダ・エリアス学派である。特に、エリアスの文明化過程論が提示する近代的自我の批判は、脱柱状化現象に現れる個人と社会の関係性の変容を分析する観点としてアクチュアリティを持っているといえよう。また、列柱状社会分割の解体を促進した脱柱状化する文化変容の位置づけが重要になるが、本稿は、これを「コミュニケーションの変容」と位置づける<sup>49)</sup>。つまり、この文化変容は、柱を超えたコミュニケーションを可能にすると同時に、柱内部での階層秩序を変化させることによって、コミュニケーションによる新たな秩序構成へと志向することになるのである。つまり、脱柱状化する文化変容とそこに現れる個人と社会の関係性の変容を分析するオランダ・エリアス学派のウォウター

スに注目し、彼が構想した「脱形式化 (informalization)」概念に提示されたエリアスの文明化過程概念の限界とそれを超克する試みを考察する。

この脱形式化概念は、単にエリアス社会学を理論的に深化させたものではない。メンネルが指摘するように、この概念の登場は、1960年代から1970年代にかけて世界各地で出現した無規律社会、すなわち「寛容社会 (permissive society)」を分析するために提起されたという背景を持っている<sup>50)</sup>。例えば、学生運動、セクシャル・レボリューション等に彩られた寛容社会に関する議論は、エリアス学派のなかでも重要な研究として位置づけられた。特に、オランダ・エリアス学派は、自国における寛容社会の出現とその状態が、これまでの「列柱状社会分割」と「多極依存型」デモクラシーとの関係に動揺を与えるに至った脱柱状化する文化変容として現れ、また他のヨーロッパ諸国より劇的な様相を示していたということもあり、他のエリアス学派よりも活発な研究を行ったのである。

しかし、この寛容社会分析に際し、オランダ・エリアス学派において、エリアスの文明化過程論の理解をめぐる論争が行われた。そこで論点は、寛大社会の出現とは、エリアスの文明化過程論からの逸脱であると同時に、この概念自身も疑わしくなったのであり、寛大社会を分析するには、「脱文明化 (decivilization)」や「文明化の挫折 (breakdown of civilization)」という観点から検討することも必要になるというものである。この論争の口火を切ったのが、ブリンクフレーフェ (Christien Brinkgreve) と コルゼック (Michel Korzec) による研究であった<sup>51)</sup>。

ブリンクフレーフェ = コルゼックは、オラン

ダの女性週刊誌における生活相談のコラムの分析を通じて、そこに描かれている親子関係、男女関係、夫婦関係の変化に、従来の固定された社会的な役割関係 (例えば、性別役割) を超克する新しい方向性を見出した。つまり、今日「地位 = 役割」関係は、社会的慣習として自動的に受容されるのではなく、むしろ諸個人間の「交渉 (negotiation)」を通じて決定されていくという変化に注目したのである。このような変容の背景には、例えば、男女関係の変化として女性の社会進出の増大という具体的な変化も指摘可能であるが、彼らは交渉における諸個人の「感情 (emotion)」の表出の多様性に注目し、そこに表れる権力関係 (balance of power) の変化を強調するのである。さらに、彼らは、このような諸個人の感情分析を強調することによって、社会学を道徳的な分析から心理学的な分析へと転換すること提示し、感情表現に見られる個人化現象に寛大社会を文明化過程における「揺り戻し現象」とみなすのである。

このような見解に対し、まず、ウォウタースは「寛容社会の出現を脱文明化、文明化の挫折と理解することは誤りである」と批判する<sup>52)</sup>。つまり、この問題は、エリアスの文明化過程論の解釈、さらにはその後の理論展開を左右するうえで、エリアス学派にとって重要なものであった。この点は、メンネルが指摘するように、確かに感情が多様に表現されるということは、これまでの社会関係の変容として位置づけられることになるが、このようなブリンクフレーフェ = コルゼックの根本問題として、彼らが強調する個人化現象は、あまりにも素朴であり、さらには、エリアスの文明化過程論の「自己抑制」概念の理解をめぐる彼らの見解とウォ

ウタースとの見解との相違を指摘する<sup>53</sup>。

ウォウタースがプリンクフレーフェ＝コルゼックに対して行った批判は、彼が1970年に提出した博士論文 *Over enkele aspecten van ontwikkelingen in de betrekkingen tussen mannen en vrouwen, ouders en kinderen, volwassen en jongeren: een voorstudie* で試みた男女関係、親子関係、世代間の変化を「tutoyeringproces」とした議論をさらに展開することによって、エリアスの文明化過程論の新展開への試みとして現れる<sup>54</sup>。このtutoyeringprocesにある「tutoyer」は「(誰かに)親しげに話しかける」という意味を持っており、これは二人称代名詞の使用の変化を現している。特にヨーロッパの言語には、二人称が二つあり、オランダ語ならuとjij、ドイツ語ならSieとduというように、前者は丁寧で形式的な「あなた」を指し、後者は若者や親しい間柄での「君」を指すことになる。文法的に見れば、このように説明されるが、ウォウタースは、この二人称の使われ方の変化、つまり、本来uを使うべき場合でもjijが一般化し、またお互いをファーストネーム(クリスチャンネーム)で呼び合う関係が生じたことに注目したのである。このような変化は、従来の社会関係(地位＝役割関係)を、プリンクフレーフェ＝コルゼックが指摘したように、社会的慣習として自動的に受容されるのではなく、むしろ諸個人間の「交渉」によって決定されていくという観点を共有している。しかし、ウォウタースは、単に交渉とそこに表れた多様な感情表現によって社会関係の変化を論じるのではなく、むしろそれらを「自己抑制の変化」として捉え直すことを試みるのである。そこで、ウォウタースは、これまでの「tutoyeringproces」から

「脱形式化」概念への転換、自己抑制概念自体の変更を試みるのである。さらに、ウォウタースは「脱形式化」という概念を構想することによって、エリアスによって論じられた情動抑制のメカニズムを「文明化過程」として展開する広範な諸個人間の相互依存関係に現象する、様々な行動様式の変化と関係した情動抑制の変容の理解に援用しようと試みる。

まず、ウォウタースは、脱形式化を構想する際、エリアスが「かつては許されていたことが、今は咎められる」というカクストンの命題によって示した「文明化された行動様式」を、「かつて禁じられていたことが今は許される」と読み替える<sup>55</sup>。ウォウタースは、このようなテーゼの読み替えを、親子関係、男女関係、大学における師弟関係、手紙の書体、音楽、ヘアスタイルといった様々な風俗現象の変化から導いたのである<sup>56</sup>。このような風俗現象の変化という観点のみに焦点をあて、従来のものを「形式化(formalization)」と位置づけ、対比的に述べるならば「非形式化(informalization)」と称することも可能であるが、むしろウォウタースの「脱形式化」は、エリアスが文明化過程概念で示した情動抑制の変遷における「自己抑制の獲得」という基本テーゼを踏襲したものと把握する必要がある。つまり、脱形式化と称される現象は、単なる行動様式の変化ではなく、それを受容する、またはある行動様式を選択する人間の自己抑制の変化として把握されなければならない<sup>57</sup>。しかし、文明化過程概念における脱形式化の位置づけをめぐって、エリアスとウォウタースの間には、若干のニュアンスの違いが見られるのである<sup>58</sup>。

この違いは、エリアス自身が提示したテーゼに対する理解に現れる。そのテーゼとは、『文

明化の過程』において提示された「対照の幅の縮小と変種の増大 (Verringerung der Kontraste, Vergraserung der Spielarten)」<sup>59)</sup>というテーゼと、スポーツ・レジャー研究において提起された「感情を抑制しつつ解放する (controlled decontrolling of emotion)」<sup>60)</sup>というテーゼである。まず、前者は、オランダ・エリアス学派が、寛容社会を特徴づける多様な風俗現象、社会関係を分析するフレームとして注目することとなった。事実、ウォウターズも前者のテーゼを出発点に脱形式化概念を構想したが、「自己抑制」概念の再構成を試みていくことで、後者を強調し、文明化過程概念の転換を見出すことになるのである。以下、これら二つのテーゼを検討し、その読み替えを通じてウォウターズが試みた文明化過程論の新展開を検証したい。

まず、「行動様式の対照の幅の縮小と変種の増大」であるが、このテーゼは、文明化が拡大することによって諸階級間の相互依存関係が活発になり、それと共に行動様式に現象する階級的差違が、一定収斂されていくことを示している。その一方で、このような行動様式の平準化は、様々な行動様式を発生させる原動力になっている。つまり、行動様式は階級的卓越性を表象するものであったが、この卓越性は、そこに帰属する諸個人が自己の威信や地位の低下を防ぐために、また諸個人との差異を創り上げるために行使されていくことになる。したがって、エリアスが指摘するように、卓越性は「個々の人間に対して絶えず習慣的に自分を目立たせる行動を繰り返し取らせ、激しい衝動規制を強化するのである」というように、「自己抑制の表象」として位置づけられるのである<sup>61)</sup>。

このようなエリアスの指摘は、階級的卓越性

を、権力関係のなかで読み込むことに成功しているが、その一方で、そこで繰り上げられる様々な脱形式化を「文明化過程における短期的で一時的な揺り戻し現象」と位置づけてしまうのである<sup>62)</sup>。ここで、エリアスが強調することは、脱形式化に現象する多様な行動様式は、一度達成された文明化の程度に制限されてしまうこととなる。つまり、この指摘は、ひとつの社会における形式的な行動と脱形式的な行動との共時的な落差は、文明化が進化した今日においては、その振り幅が激しくないということの意味するのである。このようなエリアスの理解は、彼が「第二の本性 (second nature)」として獲得された「自己抑制」を外制的強制が内面化されたものとして位置づけることにより、極端に述べれば、社会的に要求されたものが自動的に内面化され、主観へと変容されてしまう曖昧な構造を残してしまっているのである<sup>63)</sup>。ここにエリアスは文明化過程概念の脆弱性を露呈させてしまうことになるのである。

このようなエリアスの文明化過程に対して、ウォウターズは「対照の幅の縮小と変種の増大」というテーゼにおける「自己抑制」の位置づけを変更することを試みる。その際、ウォウターズは、エリアスが提示した「感情を抑制しつつ解放する」というテーゼに付け加えられた「さらに過度に自己を放縱することなく、また過度に自己を戒めることなく自己を抑制していく傾向にある」という一節に注目する<sup>64)</sup>。ウォウターズは、個人と社会との関係性の変容 - スワーンやプリンクフレーフェ = コルゼックならば「交渉 (negotiation)」 - に現象する「相互希求的な自己抑制 (Mutually Expected Self-restraint)」という概念の構想に援用する。

ウォウターズは、相互希求的な自己抑制を

「高度な感情管理」として位置づけ、この相互希求的な自己抑制が生じてくる社会的圧力の変化として、ヨーロッパを中心とした「福祉国家」を指摘する。つまり、この福祉国家が形成される過程 - 例えば、経済的貧困と階級的不平等の是正 - に応じて、人々はあからさまな地位の優劣に関する感情表出が強く抑制され、新たに自己と他者とを区別(差異化、個別化)する多種多様な感情表出、感情管理が社会的に要請されたことを指摘する<sup>65)</sup>。さらに、個人の好むと好まざるに関わらず拡大していく相互依存ネットワークにおいて、ウォウターズは、相互希求的な自己抑制が、従来の「We-Image」、 「I-image」を変容を試みる働きを担っていくことに注目している。特に「We-Image」「I-image」の変容は、脱柱状化する文化変容のなかで、女性や同性愛者(Homosexual)が、彼らの社会的地位を相対化し、従来の社会関係から自己自身を解放していく動きに顕著に見られた<sup>66)</sup>。さらに、ウォウターズはこの動きを「第三の本性(third nature)」として展開することを提起する<sup>67)</sup>。

この第三の本性は、エリアスによって「第二の本性」として位置づけられた自己抑制に対する批判的修正という試みにある。つまり、エリアスは、文明化過程を従来の個人主義(個人概念)に見られた神話性を暴露するものとして構想していたが、結果的には、文明化過程を、自己抑制の獲得として一般化してしまうのである。さらに述べれば、エリアスは、自己抑制を社会的圧力の変容という関係性のなかで把握されると説いていたが、「第二の本性」の観点から見れば、自己抑制が形成されるプロセスは、社会にとって機能的なものとして描かれてしまうという陥穽に陥ることになる。ウォウターズが

構想した第三の本性は、エリアスが文明化過程論を一般化するあまり捨象してしまった側面、すなわち個人が社会との接点において自己の本性を変更していく、いわば社会に対する抵抗的なスタンスを描き出すことを目指すものであった。それでは、最後に、オランダ・エリアス学派の成果を再考し、ウォウターズの見解をまとめることとする。

### おわりに

本稿は、エリアスの文明化過程論の新展開としてウォウターズの「脱形式化(informalization)」概念に注目し、その理論的意義を考察してきた。そこで見られた彼の議論は、驚くほど忠実に、エリアスの文明化過程論を援用してオランダの社会変動の原動力となった脱柱状化された文化変容を分析したことにある。しかし、その過程において、ウォウターズは、エリアスの文明化過程論を変更していくことになる。その試みは、単に寛容社会(permissive society)の出現を『文明化の過程』において提示された「対照の幅の縮小と変種の増大」というテーゼの現実化として理解するのではなく、寛容社会を誘引した脱柱状化された文化変容を特徴づけた「交渉(negotiation)」に現象する「自己抑制の変容」を明らかにすることであった。その際、ウォウターズは「感情を抑制しつつ解放する(controlled decontrolling of emotion)」というテーゼに注目し、このテーゼに文明化過程概念の転換を見出すこととなった。つまり、ウォウターズが文明化過程を「脱形式化過程」として再構成するとき、彼は「自己抑制」概念を中心に文明化過程論を再構成したのである。それでは、最後に、この「脱形式

化としての文明化過程」というウォウターズの文明化過程解釈のアクチュアリティーをまとめておきたい。

エリアスは『文明化の過程』を「文明化はまだ終わっておらず、未だ進行中である」というドルバックの言葉を引用して閉じている<sup>68)</sup>。この最後の一文をめぐる様々な解釈が可能になる。例えば、『文明化の過程』が書かれた1930年代のヨーロッパの状況を考えれば、この一文から、ある種の「楽観主義」を感じるものもあるだろう。確かに、エリアス自身も『文明化の過程』「序言 (Vorwort)」において、当時の社会状況を踏まえて「今日わかっていることといえば、文明化の進展につれて、一連の特殊な文明苦が生じている<sup>69)</sup>」と「悲観主義的」な叙述を行っており、この部分と最後の一文との関係はパラドクスであると指摘できよう。しかし、このパラドクスにおいて、エリアスが意図したことは、単なる「楽観主義」ではなく、「抑制された楽観主義」という観点から文明化過程を論じることであった。これは、エリアスの「戦略」であったが、この戦略は、エリアス自身によって展開される以上に、弟子のウォウターズによって積極的に展開されたのである。

この課題は、ウォウターズが文明化過程論を脱形式化過程論として再構成するときに、エリアスの戦略は、具体的な「戦術」へと展開する。この展開は、これまで議論してきたオランダに起こった社会変動、文化変容を背景としている。確かに、劇的な社会変動は、理論構築に対して大きな影響を与えることは言うまでもない。オランダ・エリアス学派が分析の対象とした「寛容社会」は、1970年代までオランダ社会にその余韻を残していたが、1980年代になると一転して脱形式化に対する批判として、

「(再)形式化」の傾向が現れ始めたのである<sup>70)</sup>。

しかし、ウォウターズはこの「(再)形式化」を短期的な(一時的な)揺り戻し現象と見なすことはあっても、それを懐古的な意味を持った揺り戻し現象として位置づけてはいない。つまり、この「(再)形式化」の主体を担った新旧のエスタブリッシュメントにとって、自分たちの権威、正統性、卓越性を顕示するためには、一定の「脱形式化」を取り込むことでしかないのである<sup>71)</sup>。とはいえ、ウォウターズは、この短期的な揺り戻し現象、すなわち「形式化」こそが文明化過程における揺り戻し現象であると反批判する。この観点は、1970年代に「寛容社会」を分析する際、文明化過程論をめぐる繰り広げられた論点をウォウターズによって徹底されたひとつの結論である。さらに、ウォウターズは、エリアスの最後の一文を「長期的な脱形式化過程は、未だ終わっていない」と読み替えることで、文明化過程を脱形式化過程という未完の営みと位置づけるのである<sup>72)</sup>。

上述したように、ウォウターズはエリアスの「戦略」をオランダ社会の分析を通じて、具体的な「戦術」を創りあげることとなった。ウォウターズが意図していることは、文明化過程を脱形式化過程として理解することによって、従来型の個人と社会との間の「矛盾」に基礎を置く社会学から、社会と個人が編み合わさった、エリアスの概念を使えば「フィギュレーション」としての社会理解への道を切り開くことになる。つまり、現代社会が社会と個人の次元が入り組んだ複雑な状況を呈しているなかで、ウォウターズは、その複雑さ(エリアス的に言えば、相互依存関係の拡大)において、「(相互

希求的な)自己抑制」と「第三の本性」によって相互依存関係を規定する社会的圧力を解きほぐし、「他者」への回路を確保しようとしている。この点は、近年注目を集めるベック、メルツラの「個人化」論、「複合社会」論との接点を見出すことも出来よう<sup>73)</sup>。しかし、彼らとの理論的接合を目指すならば、依然としてエリアス学派に特有の「政治経済学的な観点」に対する脆弱性を「自己批判」する必要がある。この点については、別に稿を起こして論じる必要があるが、簡潔に述べれば、エリアス学派は、「政治経済学的な観点」を「経済決定論」としてカリカチュアする傾向にあり、それゆえに1970年代から80年代にかけてマルクス主義(ネオ・マルクス主義、カルチュラル・スタディーズ)が成し遂げた成果との接合を困難にしているということを指摘しておきたい<sup>74)</sup>。しかし、今述べたことは、エリアス学派と他の学派との接合を検討していくうえでの課題であって、これまでのエリアス学派の成果を完全に否定することにはならない。

## 注

- 1) ダニングとのスポーツ・レジャー研究は Norbert Elias / Eric Dunning, *Quest for Excitement* (Blackwe, 1986) 大平章訳『スポーツと文明化 - 興奮の探求 -』法政大学出版局, 1995年), スコットソンとの調査研究は Norbert Elias / John Scotson, *The Established and the Outsiders* (SAGE, 1994=1965) において、それぞれまとめられている。
- 2) 社会学におけるスポーツ・レジャー研究に関する概要は Grant Jarvie / Joseph Maguire, *Sport and Leisure in Social Thought* (Routledge, 1994), 清野正義他編『スポーツ・レジャー社会学 オールターナティブの現在』道徳書院, 1995) を参照。
- 3) Elias=Dunning 1986 p.23 すでに、エリアスは『文明化の過程』の「攻撃欲の変遷」という章において、スポーツ(ボクシング)を例に挙げて、文明化過程とスポーツの非暴力化の関係を論じていた。なお、エリアス=ダニングのスポーツ・レジャー研究に関しては John Horne / David Jary, "Figurational Sociology of Sport of Elias and Dunning: An Exposition and Critique", J.Horene, D.Jary and Alan Tomlinson (eds), *Sport, Leisure and Social Relation* (Routledge & Kegan Paul, 1987), Eric Dunning / Chris Rojek, *Sport and Leisure in the Civilizing Process* (Macmillan, 1992) を参照。
- 4) Peter Gleichman et al, *Human Figurations*, Amsterdams Sociologish Tijdschrift. 1977
- 5) 通常、エリアス社会学を研究する研究者ないしグループは「フィギュレーション社会学者」、ないし「プロセス社会学者」と称されるが、この名称が定着するのが Human Figuration が出版された1970年代後半からである。しかし、本稿ではエリアス研究が行われているそれぞれの社会学界の独自性を強調する意味合いを含めて、例えば「オランダ・エリアス学派」という表記を行う。
- 6) このテキストは、1977年に英訳されて *Sociology in the Balance* として Blackwell から出版された。Johan Goudsblom, *Sociology in the Balance* (Blackwell, 1977a)
- 7) エリアスは1935年に、ドイツからの亡命者によってパリで発行されていた *Der Ausweg* に *Die Vertreibung der Hugenotten aus Frankreich* を発表している。
- 8) 『文明化の過程』に対する書評を著したのは、ボルケナウ (Franz Borkenau), 心理学者であるフォルケス (S.H.Foulkes), 弁護士であるキュルティ (Eugen Curti), 文芸批評家であるテル・ブラーク (Menno ter Braak), 社会学者であるボンハー (W.A.Bonger), 歴史家であり社会学者であるボウマン (P.J.Bouman) ら、専門が異なる6名であった。Johan Goudsblom, "Responses to Norbert Elias's work in England, Germany, the Netherland and France", *Human*

- Figurations*, Gleichman. et al, Amsterdams Sociologisch Tijdschrift (1977b) p.41.
- 9) *ibid*, p.42.
- 10) *ibid*, p.43.
- 11) *ibid*, p.44.
- 12) *ibid*, p.44.
- 13) Ralf Baumgart / Volker Eichener, *Norbert Elias zur Einführung* (JUNIUS, 1991) S.103.  
 なお、この「諸個人の社会(1939)」、1940年代から1950年代に書かれた草稿「自己意識の問題と人間像」、1987年に書かれた「We-Iバランスの変化」をまとめた『諸個人の社会』が1987年にズーアカンプ社から出版された。Norbert Elias, *Die Gesellschaft der Individuen* (Suhrkamp, 1987)
- 14) しかし、戦中、戦後間もない頃のオランダのエリアス研究であるが、その実態は、エリアスの著作の影響というよりは、エリアスを評価したテル・ブランクとボンハーがオランダ知識人界に与えた影響力にあった。Goudsblom 1977b pp.61-62.
- 15) J.M.M. de Valk, "Sociology in the Netherlands," *The Netherlands' Journal of Sociology*. Vol.6 (1970) p.90.
- 16) Goudsblom 1977b pp.63-64.
- 17) J.M.M. de Valk, 1970 p.92.
- 18) Goudsblom 1977b p.63.
- 19) *ibid*, p.63.
- 20) 本稿における、オランダ社会に関する言及 - 特に指示のない場合 - は、次に挙げる文献に依拠している。  
 Christopher Bryant, "Depillarisation in the Netherlands", *British Journal of Sociology*, Vol.32 (1982)  
 Johan Goudsblom, *Dutch Society* (Random House, 1963)  
 Arend Lijphart, *The Politics of Accommodation. Pluralism and Democracy in the Netherlands* (University of California Press, 1968)  
 水島治郎「伝統と革新 - オランダ型政治体制の形成とキリスト教民主主義 - (『国家學會雑誌』第106巻7-8号, 1993年)  
 田口晃「『多極共存型』デモクラシーの可能性 - 最近のヨーロッパ小国研究から - (『思想』2月号, 1977年)  
 - 「組閣危機と『大連合』 - オランダ型平常の政治 - (篠原一編『連合政治』岩波書店, 1984年)  
 - 「文化変容と政治変動 - 1970年前後のオランダ - (山口定他編『戦後デモクラシーの安定』岩波書店, 1989年)
- 21) この柱の数に関する議論は、諸説存在し、当初宗派の二つ(カルヴァン派, カトリック派)と世俗のひとつ(自由主義系)といった3つであったが、この世俗の柱が、自由主義系と社会主義系に分かれて、通常4つという認識が一般化している。
- 22) 各社会的機能集団と政党との関係は、Bryant (1982), 田口 (1984) を参照。
- 23) 田口 1989 237-241頁。
- 24) 田口 同上書 244頁。
- 25) 田口 同上書 244-245頁。
- 26) Abram De Swaan, *In Care of The State*, (Polity, 1988)
- 27) オランダ社会学におけるパーソンズの位置づけは、エリアス受容との関係で重要な観点である。今回は、紙面の都合もあり、この点は、稿を改めて論じたい。小活的ではあるが、ハウツプロムは、この問題をエリアス受容の観点から *Sociology in the Balance* (Blackwell, 1977a) で言及している。
- 28) W.L.Wallace, "Review of *What is Sociology ?*", *Contemporary Sociology* 8. (1979) p.768.
- 29) Mike Featherstone, "Norbert Elias and Figurational Sociology Some Prefatory Remarks", *Theory, Culture & Society*, Vol.4 (1987) p.200.
- 30) 市井吉興「ノルベルト・エリアスと秩序問題 - 文明化過程・フィギュレーション・相互依存 - (『立命館産業社会論集』第33巻第4号 - (1998年3月) 123-126頁。
- 31) 市井 同上書 121頁。
- 32) Norbert Elias 1969a (1939) *Über den Prozeß der Zivilisation I*, Suhrkamp. (赤井慧爾他訳

- 『文明化の過程(上)』法政大学出版局 1977年) S.65-68.
- 33) Elias 1969b (1939) *Über den Prozeß der Zivilisation 2*, Suhrkamp. (浜田節夫他訳『文明化の過程(下)』法政大学出版局 1978年) S.390.
- 34) ebenda, S.320.
- 35) ebenda, S.317.
- 36) ebenda, S.330.
- 37) Elias 1969b S.443., Elias=Dunning 1986 p.111.
- 38) Elias 1969b S.338.
- 39) Elias 1969a S.XLIII-LIV.
- 40) ebenda, S.LXI.
- 41) ebenda, S.LVIV. 強調は筆者による。
- 42) ebenda, S.LXIII.
- 43) ebenda, S.XLVII.
- 44) ebenda, S.LXVII.
- 45) ebenda, S.LXVII.
- 46) Johan Goulsblom, "Twenty Years of Figurational Sociology in the Netherlands". in W. H. Kranendonk, *Society as Process - A Bibliography of Figurational Sociology in the Netherlands (up to 1989)* (Publikatiereeks Sociologisch Instituut, Universiteit van Amsterdam, 1990) p.13.
- 47) John O'Neil, *Sociology as a Skin Trade: Essays towards a Reflexive Sociology*, (Heinemann, 1972)  
佐藤勉「パーソンズにおける秩序問題再考」(『社会学研究』東北社会学研究会40号, 1981年)
- 48) 内田隆三『消費社会と権力』岩波書店 1987年) p.V. 強調は筆者による。
- 49) スワーン, ブリンクフレーフェ = コルゼックらは「コミュニケーション」ではなく「交渉(negotiation)」という概念を用いている。Abram de Swaan, "The Politics of Agoraphobia On Changes in Emotional and Relational Management", *Theory and Society*, Vol.10 (1981) pp.368-377.
- 50) Stephen Mennell, *Norbert Elias An Introduction*, (Blackwell, 1992) p.241.
- 51) 本稿で言及したブリンクフレーフェ = コルゼックの研究の整理は, Mennell (1992) とウォウタースの以下の文献を参照して行った。  
Cas Wouters, "Informalization and The Civilizing Process", *Human Figurations*, Gleichman et al, Amsterdams Sociologisch Tijdschrift 1977.  
- *Van minnen en sterven: Omgangsvormen rond seks en dood in de twintigste eeuw* (Uitgeverij Bert Bakker Amsterdam, 1990)  
- *De Informalisieringstheorie in de Civilisatietheorie* (FrenUniversitat-Gesamthochschule in Hagen, 1997)
- 52) Wouters 1977 p.437.
- 53) Mennell 1992 p.243.
- 54) Wouters 1977 p.450., 1990 p.281.
- 55) Wouters 1977 p.437.
- 56) ibid, pp.438-440.
- 57) 市井 前掲書 127頁。
- 58) 岡原もエリアスとウォウタースとの文明化過程論に対するニュアンスの違いを指摘している。岡原正幸『ホモ・アフェクトス:感情社会的に自己を表現する』(世界思想社1998年) 93頁。
- 59) Elias 1969b S.342-351.
- 60) Elias=Dunning 1986 p.44.
- 61) Elias 1969b S.347.
- 62) Wouters 1977 p.244.
- 63) ネットケルも同様の指摘を行っている。ジークハルト・ネットケル『地位と羞恥』(岡原正幸訳法政大学出版局 1998年) 186頁。
- 64) Elias=Dunning 1986 p.21 強調は筆者による。
- 65) Cas Wouters, "On Status Competition and Emotion Management: The Study of Emotions as a New Field", *Theory, Culture & Society*, Vol.9 (1992) pp.234-239.
- 66) この点に関しては, 次の論文を参照。  
Bram van Stolk / Cas Wouters, "Power Changes and Self-Respect: A Comparison of Two Cases of Established-Outsider Relations", *Theory, Culture & Society*, Vol.4 (1987)  
Cas Wouters, "Developments in the Behavioural Codes between the Sexes: The Formalization of Informalization in the

- Netherlands, 1930-85", *Theory, Culture & Society*, Vol.4 (1987)
- 67) Cas Wouters, "How Strange to Ourselves are our Feelings of Superiority and Inferiority? Notes on *Fremde und Zivilisierung* by Hans Peter Waldhoff", *Theory, Culture & Society*, Vol.15 (1998) p.139.
- 68) Elias 1969b S.454.
- 69) Elias 1969a S.LXXX.
- 70) Cas Wouters, "Formalization and Informalization: Changing Tension Balances in Civilizing Processes", *Theory, Culture & Society*, Vol.3 (1986) pp.5-6.
- 71) *ibid*, p.6.
- 72) Wouters 1987 p.425.
- 73) Ulrich Beck, *Risikogesellschaft: Auf den weg in eine andere Moderne* (Suhrkamp, 1986) (東廉・伊藤美登里訳『危険社会：新しい近代への道』法政大学出版局, 1998年)  
Albert Melucci, *Monads of the present Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society* (Temple University Press, 1989) 山之内靖他訳『現在に生きる遊牧民』岩波書店, 1997年)
- 74) この問題は、イギリス・スポーツ・レジャー社会学内での重要な論点となった。Horne=Jary (1987), Dunning=Rojek (1992) を参照。